

伊藤若冲「動植綵絵 南天雄鶏図」



実体験が活かされている！？

伊藤若冲（1716年～1800年）は、京都の市場町に青物問屋（青果問屋）の長男として生まれました。家業のかたわら絵を描いていましたが、30歳で本格的に絵を学び始め、39歳の時に家業を弟に譲り、絵を描くことに没頭する生活に入りました。その後、四半世紀にわたり絵を描くことだけに専念した生涯を送り、84歳で生涯を終えました。

若冲は、「[動植綵絵](#)（さいえ）」が有名で、単なる写生画であるにもかかわらず、その色彩性、デザイン性や生命が宿っているかのような描写力、隅々まで行き届いた集中力の高さで世界的にも評価が高い日本画家です。若冲のこれらの特徴は、市場町で青物問屋の子供として生れ、育った実体験が礎となっているのではないかと評されています。（[あの人の人生を知ろう～伊藤若冲～より引用](#)）ちなみに、与謝蕪村は俳人として有名ですが、画家としても名高く、お互いに知り合っていたかは分かりませんが、若冲と同じ年に大阪で生まれました。日本を代表する天才画家が、同じ年に、同じ近畿で誕生したことに奇跡的な偶然を感じます。

根拠に基づく動物飼育

今回は、興味深い文献と報道記事を見つけましたのでご紹介します。

「[小学校における動物飼育の状況と教師の負担感の研究（2009年）](#)」 [田中理絵](#)、立川奏枝（山口大学教育学部）

2008年に山口県内のすべての国公立小学校（330校）に対して実施したアンケートで66.1%の有効回答率を得た。調査結果では、小規模小学校ほど動物飼育を実施していない結果を得た。また、「学校に動物がいなくても、教育に差し障りがない」との設問に対し、動物飼育をしている小学校ではそのように考えるのが61.3%であるのに対し、動物飼育をしていない小学校では81%に達した。「学校で動物飼育を行っていく必要がある」との設問に対し、動物飼育をしている小学校ではそのように考えるのが71.1%であるのに対し、動物飼育をしていない小学校では46%にとどまった。
（論文から抜粋）

田中等の研究によると、動物飼育をしている小学校ほど「動物飼育が教育に必要である」と実感し、動物飼育をしていない小学校ほど「動物飼育の必要性」を感じていない傾向が見て取れたと



報告されています。田中等の研究では、動物飼育の現状に関するそれ以外のいくつかの点を見出しています。

子供たちの教育に実体験が必要なのは周知のことですが、小学校という単位でも「動物飼育の必要性」は実際に飼育してみないと見いだせない傾向が見て取れます。

子ウサギデビューの時の飼育舎

[家庭のペットが子供の成長を促進～ペットが子供の社交性と自尊心に役立つことが新たな研究で明らかに～](#) Mars Press Release Mar, 2017

「International Journal of Environmental Research and Public Health」の中で発表されたリバプール大学の研究の主執筆者、レベッカ・ピュアウォル（Rebecca Purewal）氏は次のように述べています。「ペットを飼うことが自尊心に与える影響にとっての最も重要な臨界期は、6歳未満の子供、および思春期前と10歳以上の若者のようです。一般的に犬と猫が最も社会的なサポートをしてくれると考えられていますが、それはおそらく他のペットと比べて交わりと見返りのレベルが高いためです。西洋および非西洋の文化圏では、ペットが精神的なサポートの役割を担っていることから、若者が自身への満足感を感じ、自己肯定的な考え方ができるような助けになっている可能性があります。」
（記事より抜粋）



以前から、動物の人間に与える良い影響が知られており、動物との関わりが病院での入院生活や老人介護施設での生活、学校教育に取り入れられていました。日本国内の今までの調査、研究でも「動物の、子供の成長に与える良い影響」が示されていましたが、今回の研究報告でも、それが裏付けられたものとなりました。特に目を引く点は、6歳未満の就学前の時期から高校生までの時期が重要な時期であることが示された点です。



「みんなのがっこうのどうぶつ」が日本経済新聞に取り上げられました。

日本経済新聞(夕刊)

2017年(平成29年)3月3日(金曜日)



動物の世話を学ぶ児童(東京都中野区の城宮小)

なまねがたに、動物飼育を
あきらめたという。
同市では2012年度に全
公立小の8割超にあたる92校
で飼っていたが、16年度は6

学校 鳥インフルで逆風

生4人が校庭の飼育小屋に入 に対応。年末年始は近所の住

正しい知識で飼育しようと、
獣医師会と連携する地域もあ
る。

獣医師会「正しい知識を」 出前授業や解説書作成

愛知県獣医師会は2006年
から、獣医が動物の特徴や病氣
の症状などを解説する「ふれあ
い教室」を希望する小学校で開
いている。15年度には「学校飼
育動物飼育獣医師制度」を創設。
相談を随時受け付けるほか、今
年1月には動物の飼育方法を分
かりやすく解説した教員向け
ハンドブックも出版した。
昨年6月にふれあい教室を開
いた南知多町立大井小学校は、飼
育飼育の長い歴史を持つが、動
物を飼育するかどうかを巡り職員
間で議論にもなったこともある。
動物が死んだときの子供の影
響などを考えたため。最終的



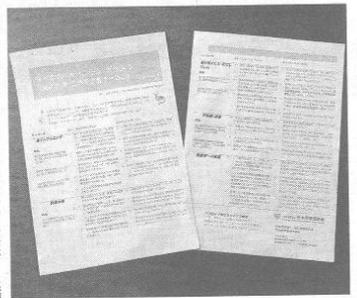
なのがっこうのどうぶつ」と題
したニュースレター「写真」を
発行。昨年12月、各地で鳥イン
フルエンザが相次いで発生した
際は号外を出し、冷静な行動を
呼びかけた。群馬県獣医師会な
ど、地元の教育委員会から委託
を受け、「学校獣医師」として
活動しているところもある。

日本獣医師会学校動物飼育支
援対策検討委員会の処愛美副委
員長は「小屋を清潔に保ち、動
物が野鳥や野鳥のフンと接触し
ないようにするなどの措置をと
るべき」と助言。そのうえで
「困ったことがあったら、近く
の獣医師に相談してほしい」と
話している。

獣医師会「正しい知識を」 出前授業や解説書作成

日本獣医師会学校動物飼育支
援対策検討委員会の処愛美副委
員長は「小屋を清潔に保ち、動
物が野鳥や野鳥のフンと接触し
ないようにするなどの措置をと
るべき」と助言。そのうえで
「困ったことがあったら、近く
の獣医師に相談してほしい」と
話している。

には命の大切さを学ぶ得難い機
会として継続を決定。獣医がい
つでも相談に応じてくれること
も支えになった。同校の皆川崇
真教諭は「弱い生き物に接する
ことで、相手を思いやる気持ち
が子供たちに芽生えている。友
達に対しても感情的にならなく
なった」と効果を実感する。



なのがっこうのどうぶつ」と題
したニュースレター「写真」を
発行。昨年12月、各地で鳥イン
フルエンザが相次いで発生した
際は号外を出し、冷静な行動を
呼びかけた。群馬県獣医師会な
ど、地元の教育委員会から委託
を受け、「学校獣医師」として
活動しているところもある。

理想的なのは、動物飼育で
学ぶことの目標を作って学校
全体で共有し、教育課程に組
み込むやり方だ。動物アレル
ギーの児童がいたとしても、
エサの準備や飼育日誌の記録
でかわるといった工夫が可
能だ。

動物が死んでしまった場合
は、お別れ会を開いたり手紙
を書いたりして、気持ちを外
に表す機会を持つといい。命
と向き合うという効果も明
かになっている。

全国各地の獣医師会が行っ
ている「学校飼育動物支援
活動」の一つとして取り上
げていただきました。
「未来を担う子供たちの教
育に役立ってもらいたい」
と、全国の獣医師達が活動
しています。安心して学校
での動物飼育を続けてくだ
さい。

